

『こころ』は本当に名作か

—— 映画文学人生論

小谷野敦 (1962-)

『「こころ」は本当に名作か』2009) 「新潮新書」

『夏目漱石を江戸から読む』(1995) 「中公新書」

参考：三浦雅士『漱石—母に愛されなかった子』
(2008) 「岩波新書」

『谷崎潤一郎読本』文芸臨時増刊 (1956)

文学作品のよしあしに普遍的基準はない

夏目漱石の『こころ』は、近代文学の名作として百年後の現在も読まれている。高校の教科書になんども採用され、文庫本の売上総数は通算二千万部以上ともいわれるロングセラーだ。

その『こころ』は本当に名作かと疑問視する本があらわれた。著者の小谷野敦は、「文学作品のよしあしに普遍的基準はない」とことわっておいて、「私には疑わしい名作」としている。その理由としては、たとえば、「Kが失恋して自殺をしたのは明らかなのに、下宿の母娘ともそれに気づいていないようなのは不自然だ」「これを、実は気づいていて知らないふりをしていたのだという説があるが、やはり漱石のミスだろう。しかも重大なミスである」。

「『こころ』は文章さえよくない」ともいう。具体的な例はあげていないが、谷崎潤一郎と武田泰淳との座談会で、「あれ、半分くらいいいんで、実に長ったらしく延ばしてるように思う」という谷崎の発言や「ああいうものが日本の精神の根本である、という考え方が、非常に日本の文化を貧弱にさせてるんだ」という武田の発言を紹介している。

今ごろになって、そんなことを言われても困ると、漱石はあの世で苦笑しているかもしれない。それとも、百年後にそんな本が出版されることこそ名作の証拠とうなづいているだろうか。



『こころ』は本当に名作か _____ 映画文学人生論

小谷野敦には『夏目漱石を江戸から読む』という著書もある。『坊っちゃん』を江戸っ子の視点から、『虞美人草』をお家騒動の視点から読むという読み方は面白い。『こころ』については、最近の『こころ』論にも目くばりし、「同性愛小説か？」という角度から批判的に論じている。

嫌いなものに強くひかれたのか、小谷野は漱石の熱心な読者だ。『文学論』も読んでいる。「漱石は「F+f」の定式を用い、なぜ人が文学作品に感動するかを究明しようとしたが、失敗した」「なぜ文学作品が人を共感せしめるかという問いに対する答えは出ていない」などという問い

しかし、漱石が「F+f」という文学的形式で表現しようとしたのは、「人間はいざという間際には誰でも悪人になる。他人も信じられないし、自分自身も信じられない」という文芸上の真実だと思う。この真実は面白いといえれば面白いし、面白くないといえれば面白くない。

どう受け取るかは、読者の（F+f）によってさまる。漱石の理論によれば、Fは認識的要素、fは情緒的要素。この場合、Fは「こころ」で、fは読者の情緒である。小谷野敦は、ここで三浦雅士の『漱石―愛されなかつた子』を紹介した。谷崎、武田、小谷野など母に愛されたことを疑っていない男は『こころ』を好まない傾向がある。

朝貌や惚れた女も二三日

漱石